

敵は空から飛行機で補給するし、トラックは夜間堂々と灯火をつけて走って来る始末に物量の差を見せつけられた。我が方の輜重隊は、昼間かくれている林をドラム缶爆弾で焼き払われ、逃げる処を機銃掃射と爆弾でやられ、補給物資は全滅の状況だったので、連隊本部までは補給が届いても前線までは届かなかつた。機関銃の兵隊が馴れぬ手榴弾を投げようとして後に落したのが坂を転がり落ちて爆発し、味方の兵が負傷した例もあつた。

作戦中に無線で台湾沖海戦で敵空母多数撃沈の報が入り万歳を叫んだこともあつた。私は歩けないので馬にくくりつけられ宝慶まで後退したが、途中の路が戦車壕が掘られていて真つ直歩けず、苦勞の末野戦病院に入り手術するのを断っていたらそのうちに治ってしまった。

耳の方は現認証明する上官がないため、五十年近くたった現在でも傷痕軍人になっていない。負傷すること四度びである。

## 正江作戦従軍記

青森県 大柳 弘

私は昭和十六年に一度召集され、十九年六月、再度の召集により弘前の三十一連隊に入った。父は既に亡く、新婚間もない妻と母の二人が残されたが、家は農業をやっていたので衣食住の心配はなかつた。

入隊後、直ちに編成された四十七師団(彈部隊)は当時苦闘を続けたニューギニアの援軍用として作られた部隊で、強力な装備を持った大本営直轄の師団だった。私は百三十一連隊第三大隊第十一中隊に編入され、八戸海岸で連日逆上陸と斬り込み訓練、タコ壺掘りに明け暮れた。

それが船不足で南へ行けなくなり支那派遣に変わり、正江作戦発起の時期に合わせ、十九年十一月中旬、八戸市鮫駅を出発、貨車輸送で一路漢口武昌を目指した。

漢口に近づくにしたがって在支米空軍の空襲が多くなってきたので、昼は下車して鉄路から遠く離れた山林や部落に退避し、貨車は切り離して草で偽装し、夜間だけの運行となったので輸送は大巾に遅れ、十二月十日ようやく漢口に着いた。

第二十軍は重慶攻略の代りに芷江飛行場奪取を目標に作戦を立て、永豊付近に部隊の集結を命じたが、第四十七師団の三個連隊のうち重広三馬大佐の第三百二十一連隊だけが一月二十三日に着いただけで、他の連隊は敵の妨害を受け遙か後方を前進中だった。

漢口からの四十日間は敵空襲を避けるためすべて夜行軍で、三十キロの装具をつけて洞庭湖畔を征くころは、敵機の銃爆撃が激しくなり、道路の両側には日本軍のトラックが何台も横倒しになって焼けただれた残骸をさらして、疲れ果てた将兵に戦争の惨烈さを告げていた。

我が大隊は永豊の近くの青樹坪で作戦準備を終え、出撃命令を待つ。軍は第四十七師団全部が揃うのを待ち切れず、重広支隊を編成、四月五日出撃を命令した。

一個連隊で師団全部の戦いをする訳だから苦戦が予想された。芷江の手前に洋溪の要衝があり、その攻略を当面の目標とし、途中を流れる資江を渡河することになった。私は射撃が得意だったので軽機の射手を命ぜられ、九六式軽機で戦った。この軽機は従来の一十年式とは違って軽量で、命中精度も良く一分間に三百発も射てた。

四月十四日、夜になるのを待って我が小隊は全員便衣に変装して地下足袋をはき、「津軽」「岩木」を合言葉に出撃、真夜中に渡河点に着き、川原に降り立ち、五隻の渡し船に分乗、対岸に到着。闇をすかして見ると敵の歩哨がいる。全員足音を殺して匍匐前進。「誰か！」日本語で敵の歩哨が誰何するのに驚いた。小隊長以下白刀を振るって敵壕内に殺到、格闘となる。激しい白兵戦の末、ほとんどの敵をたおす。逃げた敵兵は部落の陣地に據り、再び銃撃戦となった。

十五日午前三時、これらの敵をやっつけ戦闘は終わった。捕虜八人、六十人の敵をたおした。軍司令官から我が小隊に感状が授けられた。

この日重広支隊に対し友軍機から通信筒が投下され、軍司令官からの激励文と皇后陛下からの御令旨が入っていた。御令旨には本作戰における傷病兵を大切に扱うようにとの御沙汰であった。同時に恩賜の煙草も投下されたそうであった。

うちの中隊長はその後、四月二十六日小塘高地で敵と交戦中手榴弾を受けて、鈴木小隊長と共に戦死してしまった。目指す洋溪への道は原始林と大竹林がびっしり生えた高い山が両側に迫り、その間に開けた田圃の中をウネウネと続く小さな道だった。所々に部落があり、その間を縦横に川が流れている。部落内を流れる川には必ず屋根のある立派な木造の橋がかかっている。夜ばかりだから判らなかつたが、おそらく極彩色が施されていることだろうと思われた。

洋溪の右翼陣地に紅岑山があった。第三大隊は支隊本部と共に中央を攻撃した。紅岑山の地形は極めて複雑で攻めるも守るも容易でない。敵味方が入り交じり同志討ちのため下士官一人が死んだそうだ。

目前三十メートルの先まで敵が攻めて来た。ピョコ

ン、ピョコンと敵の頭が出ては引つ込む。それを狙って軽機で掃射したが敵も迫撃砲、手榴弾で攻めてくる。迫撃砲弾の至近弾がシュツ、シュツと落ちる。ヒュルヒュルは心配ないが迫撃砲三門でやられると逃げ込む穴がない。射ちまくっているうち弾が無くなってきた。「弾を持ってこい」と叫ぶが傍らの弾薬手がやられている。

正午すぎ敵のP51が姿を現し低空で二度、三度と旋回し、やがて銃撃を始めた。パッパッと土煙りをあげて通り過ぎる。対空射撃をしようとすれば地上の敵から射たれる。轟音と銃撃音で耳が破れそうだ。

銃撃のあとは待ち構えていた別の機から爆撃が始まり、焼夷弾が次々に投下され、所々に火柱が立ち昇り、逃げまどう人馬に爆弾が落され、タコツボは土砂が崩れ、埋められそうになった。やがて敵機が去り味方はどうなったかと周りを見渡すと高い松の木の枝に、真っ白い大きな布がファツとかかかっている、その下に灰色の丸い筒がぶら下がっている。落下傘爆弾だった。信管が物に触れないので不発になったのだった。

敵は密林を焼き払い、人馬特に馬を狙うことによつて日本軍の輸送を絶つ作戦らしい。輸送隊の損害は日増しに増大し、われわれの食糧も不足勝ちになり、止むを得ず民家で徴発するようになった。幸いこの地方は穀倉地帯なので農民も豊かで大きな家に住み、オンドルでなくベットに寝ていた。副食はこの地方にたくさんある竹林の筍汁が定食になって助かった。

芷江作戦の敵は米式装備で強かった。特筆すべきは夜襲をかけられたことと、こちらが突つ込んででも逃げないことだった。

夜も次第にふけ、昼の疲れで眠くなりかけた頃、カァカァとカラスの鳴き声が低く聞こえてきた。カァという声は次第にその数を増している。この密林に巣くっているカラスも爆弾の被害者だったのかと同情していると、その鳴き声は次第に高く、こちらに近づいてくる。ずいぶん沢山のカラスが寝ぐらの奪い合いをしているなあと思っているうちに、その鳴き声はギャァ、ギャァと変わり、間もなく射撃が開始されて、敵襲だとわかった。

夜襲は日本軍のお家芸の筈だが、お株を奪われた格好だった。「グワン」と手榴弾が二発、三発と投げ込まれた。中国軍は手榴弾専門の中隊があるらしい。軽機を射ちまくって漸く撃退したが、気がついたら左手首から血が流れ出ている。手榴弾が当たった石か木の破片が当たらしい。幸いにも軽傷ですんだが五十年経った今でも少し左手首が曲がっている。

敵は朝から夜まで一日中射つてくる。よく弾が続くものだと感心した。敵の陣地には山のように葉挾の山ができていた。ある時、水汲みに谷に降りて水を汲んでヒョイと前を見ると敵兵も水汲みにきていて目と目が合いビククリしてお互いに逃げて帰ったことがあった。

紅岑山を落とすのに四日間かかったが続いて敵の主陣地洋溪の街に突入した。街には人影はないが急斜面の山に敵陣がある。わずか百メートルの対峙となった。夜になってまた襲撃を受けた。無言のまま突つ込んできた。

星明かりの中を、下から盛り上がってくるように自

動小銃を乱射しながら各個前進してくる。分隊長は「照明弾を打ち上げる」と叫ぶが射撃音でその声もかき消される。敵は重機の銃身に手をかけて引き抜こうとした。射手は腰の短剣でその手を打ち払い乱射乱撃の末、ようやく撃退した。

十人位の遺棄死体があつたが朝になつたら敵の死体は跡形なく片付けられていた。敵が夜中に戦場掃除を行つたのだ。

山間の谷間に朝日が昇るとP51の襲来だ。敵陣後方でサーッと白布が揚げられ青、黄、赤の布が敷かれ飛行機に合図している。わが軍から擲弾筒が打ち込まれたが当たらない。敵機が頭上に殺到して、キーンと神経を引き裂くような金属音と共にパンパンと機銃掃射が始まつた。皆が一斉にタコ壺にシヤガミ込む。次は第二陣の爆撃だが今日は少しオカシイ。タコ壺に火焰がとびこんできたのだ。新型爆弾は極めて引火性の高い軽質油に燐を混入してドラム缶に詰めたもので、地上で爆発して油が四方に飛び散つて、物に付着した所で発火して燃え出すというものであつた。軍服に燃え移

つた炎は手で払つた位では消えないため火タルマになつて地面をころげ回つて消火に懸命だ。ころげ回る地面もポッポッと炎を上げて燃えている。それを目懸けて敵は一段と猛射を浴びせてくるものだからたまつたものじゃない。

このドラム缶爆弾は初体験ということもあつて、味方とくに馬部隊は密林が焼き払われ、隠れるところがなくなり大損害を受けた。徒歩部隊もタコ壺掘つて応戦したがドラム缶爆弾や迫撃砲にやられた。幸い私は火傷一つ負わず助かつた。

その後二回、三回とやられるうちにこちらの対応も上手になり損害は軽くなつていった。対戦四日目、支隊は防衛態勢に入り、命を待つことしばし、やがて軍より反転命令が下つた。戦いはきびしかったが上官の命令は天皇陛下下の命令と思えの教育を受けていたので、国のために尽くさねばと思ひ、命を捨てる覚悟で戦つた。中隊の幹部は戦死したり負傷したりで全滅の状態になつたが、われわれ兵隊はお互いに励まし合つて頑張つた。

敵が包囲する中を後退作戦に移って、最後尾になった時、同郷で最年少の落合一次君が大腿部貫通銃創を受けた時は、敵が追いかけてくる中を肩に担いで夢中で逃げ切り、野戦病院に収容したが間もなく死んだそうので可哀想だった。

四月五日作戦開始から約二ヵ月にわたる長い悪戦苦闘が終わり、六月初旬ようやく前進基地永豊に帰りついた。戦塵を洗う暇も無く北支済南を目指してふたたび行動を開始した。

途中、終戦の日、共産八路軍の夜襲を受け「日本へ帰っても駄目だ。こちらに來い命は保障する」と勧められた。二十一年四月佐世保に帰った。

## 私の想い出

青森県 畑 中 由 松

昭和十七年四月一日、教育召集により、歩兵第五十二部隊補充隊速射砲中隊に入隊。

同年七月十日、下士官候補者を命ぜられ、十二月二十四日下士官候補者集合教育のため盛岡北部六十二連隊において八ヵ月の教育を受けた。なお北海道千歳郡恵庭の新設された教育隊に派遣されました。当時アツツ島において、山崎部隊の玉碎により、札幌市で慰霊祭が行われ、その儀仗兵として参加した想い出がある。

十一月三十日、教育終了式での北部軍司令官の訓辞で「君達は北部軍初級幹部として立派に任務を完うすることを望む」と話され、少しばかりの酒が配られ、各連隊から派遣された戦友と別れ、原隊復帰となった。復帰間もなく甲種幹部教育の名のもとに大湊海軍、工兵隊、それに我が第三百三十一連隊の合同上陸演習が津軽半島逢田海岸で実施され、これに参加しました。その時、波は高く、海は荒れていた。我々の上陸用舟艇は木の葉のように揺れ、工兵隊の号令で着岸とともに一斉に岸辺へ飛ぶのである。意地の悪い工兵になると十数メートル沖合で舟艇のエンジンを止め、ある将校は胸までつかり高波にさらわれそうになる等、とくに将校の乗った舟艇はそのようであったと思う。